

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：21601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21592811

研究課題名（和文）福島県北地域における小児救急の課題に応じた看護支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of nursing support program in response to the challenge of pediatric emergency in Fukushima prefecture north region

研究代表者

鈴木 学爾 (SUZUKI GAKUJI)

福島県立医科大学看護学部・助教

研究者番号：00347197

研究成果の概要（和文）：

本研究では、地方都市における小児救急看護の現状を把握し、地域の特性や現場で働く看護師の実践に即した意見を考慮した看護支援プログラムを開発した。

看護師は、「広範囲の医療圏で小児に不慣れな医師と看護師で子どものケアになれない看護師が多忙な中でケアを行い、学習の機会も乏しい」く、保護者は「正しい知識が乏しく、子どもに症状が出るとすぐに不安で受診する」事などが明らかとなった。この結果から、看護師・保護者向けに学習プログラムを開発した。

研究成果の概要（英文）：

In this study, to understand the current state of pediatric emergency care in the local city, we have developed a nursing support program that takes into account the opinions in line with the practice of nurses working in the field and local characteristics. "Nurse that may not work in child care in doctors and nurses unfamiliar with the child makes a care in busy in the medical area a wide range of learning opportunities is also poor" clause, the nurse, correct "knowledge guardian is poor, to visit the anxiety symptoms immediately goes out of children" and it has been revealed. From this result, I have developed a learning program to only nurses and parents there.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700.000	210.000	910.000
2010年度	1.100.000	330.000	1.430.000
2011年度	700.000	210.000	910.000
年度			
年度			
総計	2.500.000	750.000	3.250.000

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：医歯薬、看護学、生涯発達看護学

キーワード：小児救急看護、地域特性

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

日本の小児救急医療は、小児科医の開業に伴い小児救急に携わる医師が減少していることが言われている。一方、保護者は小児科医に診てもらいたいというニーズがある。また、救急外来を受診する子どもが増加している事があげられている。

実際に福島市の第一・二次救急を扱う病院を対象とした調査では、救急外来を受診した15歳未満の子どもは全体の27.5%を占めていた。これらの患児の多くは二次救急ではなく、軽症ですぐに自宅に帰ることが出来る一次救急の患児であったと報告されている。また、救急外来の看護師は必ずしも小児看護の経験があるわけではなく、福島県内の看護師からも第1次小児救急看護の現場で子どもと家族への対応が困難であるという意見があり、子どもと家族への対応に困難を抱えていることが分かった。

子どもが病気になった時に親が対処できる能力を効果的に高めるための支援を行えるのは救急外来の看護師であると考え。救急看護師がこの役割をはたすことにより、保護者が自宅で対処できると考えられる。

このような対応が福島県でも必要と考えられるが、福島県の特徴として全国第3位の広い県土を有しており、1医療施設の診療地区が広く、さらに小児科医の人口割合が全国平均の8.4人に比べ7.1人と少ないという現状がある。そのため、福島県内の子どもと家族は救急外来のある病院を受診するまでの時間が掛かることや、小児科医のいる救急外来を受診することが困難な状況にあるため、福島県内の救急外来の看護師の役割が重要になると考えられる。

2. 研究の目的

福島県内に焦点を絞り、福島県内の第二次救急外来で行われている第一次小児救急看護の現状と救急外来を受診した保護者のニーズ、福島県内の保護者の子どもが病気になった時の家庭での対処行動や受診行動から、福島県内の第一次小児救急看護の問題点と改善点を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

福島県の小児救急医療に関する地区診断を実施した。また、福島県内の2次救急指定病院の看護師へのフォーカスグループインタビューを行い、小児救急看護の実際と問題点を明らかにした。さらに、福島県内の保育所および幼稚園に通う子どもへの保護者への救急外来受診時の様子についてアンケート調査を実施した。

これらの結果から、マルカム・ノールズの成人学習理論アンドラゴジーの学習プロセスの構成要素を取り入れた看護師・保護者向けの学習プログラムを開発した。

4. 研究成果

看護師のフォーカスグループインタビューの分析結果では「広範囲の医療圏で小児に不慣れな医師と看護師が対応している」「電話で診療可能な施設を紹介し、受診の判断の手助けを行う」「子どもの重症度を見極めながら、母親に子どもが病気になった際の対応方法を説明する」「電話相談での受診の判断に悩みながらも、受診後は子どもを直接見て、重症度を見極めながら、その場で具体的に説明する事を心がけている」「子どもの看護の経験・育児経験も様々であり、小児看護の研修の有無も様々である」「子どものケアに慣れない看護師が多忙な中でケアを行い、学習

の機会も少ない」「親は正しい知識が乏しく、子どもに症状が出ると不安ですぐに救急外来を受診する」「親は昼間に受診しにくい状況であり、さらに受診を薦める環境である」「救急時だけではなく、健康な時から病気になった時の対応方法を説明する」以上の9つのカテゴリーが導き出された。この結果から、看護師の学習機会の確保と保護者への救急時の家庭看護方法の知識の講習が必要であると考えられる。

保護者へのアンケート調査結果では家族形態や自宅から病院までの所要時間等の違いでの受診行動の有違差は認められなく、保護者全般が救急外来は救急対処の場所ではなく、通常の完璧な治療を行う場所との認識が強い事が明らかになった。また、保護者の現状として「複合家族であっても不安をあおりたて、受診を促す背景」があることや、「限られた知識の中で、病気の経過が分からず、受診の判断・家庭での看護方法が分からない」事などが明らかになった。

そこで、マルカム・ノールズの成人学習理論アンドラゴジーの学習プロセスの構成要素を取り入れた看護師・保護者向けの学習プログラムを開発した。看護師向けのプログラム内容は広範囲の医療圏をカバーするために、救急外来受診の有無について保護者との相談方法を中心に取り入れた。保護者についても自宅から病院までの距離が長いことから、家庭看護の方法、受診の目安を中心とした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]
○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 学爾 (SUZUKI GAKUJI)
福島県立医科大学看護学部・助教
研究者番号：00347197

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：